

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成26(2014)年4月1日発行 (年4回1・4・7・10月)
3,800部発行 無料 古紙パルプ配合再生紙使用

怪談の定番「一枚、二枚…」と皿を数える幽霊お菊さん、学校の怪談として有名になったトイレの花子さん、水木しげる氏が描いた鬼太郎をはじめとするアニメの妖怪たち、近年流行りのゆるキャラのなかにも妖怪のようなキャラクターが多く登場します。私たちにとって幽霊・妖怪は身近な存在と言っても良いのではないのでしょうか。

江戸時代にも幽霊・妖怪を絵画にすることが大いに流行しました。そこに描かれた姿を見ていくと、もちろん恐ろしい幽霊もありますが、それだけではありません。美しい幽霊もいれば、哀愁ただよう者、ひょうきん者、あるいはなんと愛らしい妖怪や滑稽な妖怪もいます。

大正から昭和にかけて活躍した日本画家で風俗研究家でもあった吉川観方(1894-1979)は、そんな個性豊かな彼の姿に魅せられ、幽霊や妖怪を描いた作品の収集に努めました。これらは日本を代表する幽霊・妖怪画のコレクションとなり、現在は福岡市博物館に所蔵されています。今回の展覧会では、このコレクションから選りすぐりの幽霊・妖怪画を大々的に展示します。

お岩さん、お菊さん、ろくろくび、河童、天狗、見越入道、猫またなどなど、有名無名、個性派ぞろいの幽霊・妖怪たちが名古屋にやってきます。美と恐怖とユーモアに満ちあふれた世界へおこしください。
(瀬川貴文)

2013年度の展覧会を振り返って

資料・作品の展示は博物館・美術館（ミュージアム）の主だった活動のひとつで、各館の顔に当たる部分です。展覧会には時々の流行や研究の成果が反映され、ある意味で時代を映す鏡ともいえます。今回は2013年度（この原稿を書いている2014年1月中旬まで）の話題の展覧会と最新の動向をお伝えし、ミュージアムの今とこれからを考えてみます。

【2013年度の記憶に残った展覧会】

印象に残った展覧会をいくつかご紹介します。「夏目漱石の美術世界展」（5月14日～7月7日、東京藝術大学大学美術館ほか）では、「漱石が記した美術作品」を集め、作中でしばしば紹介される漱石の美術観を再現するユニークな試みでした。当時刊行された漱石の本は装丁にも芸術性があり、明治後期に特に発達した、美術と文学の親和性を楽しむことができました。同じく明治期の美術として、「明治のころ - モースが見た庶民の暮らし -」（9月14日～12月8日、江戸東京博物館）、「空前絶後の岡倉天心展 - 大観、春草、近代日本画の名品を一堂に -」（11月1日～12月1日、福井県立美術館）、「横山大観 - 良き師、良き友」（10月5日～11月24日、横浜美術館）、「生誕140年記念 下村観山展」（12月7日～2月11日、横浜美術館）など、誕生150年・没後100年を機に、美術行政と日本画新派の指導に従事した天心周辺にスポットを当てた展示が続きました。先行きの見えにくい今日、社会が大きく変革を迎えた“明治”という時代に、新たな芸術の創出を試みた人々への関心が高まっているのかもしれない。

秋には、「国宝『卯花塙』と桃山の名陶 - 志野・黄瀬戸・瀬戸黒・織部 -」（9月10日～11月24日、三井記念美術館）、「光悦 - 桃山の^{ツツジ}古典」（10月26日～12月1日、五島美術館）、「井戸茶碗 - 戦国武将が憧れたうつわ -」（11月2日～12月15日、根津美術館）と、茶碗を中心に屈指の名陶の集う展覧会が重なりました。創造性に満ちた時代の息吹が感じられ、評判となりました。

興味深い試みと感じたのが「暮らしと美術と高島屋」（4月20日～6月23日、世田谷美術館ほか）で、高島屋を中心に戦前から現代にいたる企業文化が美術に対して果たした役割に光を当て、販売商品と美術の境界を越えた活動を取り上げられました。くしくも昨年は1970～80年代に芸術文化と百貨店活動を融合させた「セゾン文化」を生み出した、作家で元セゾングループ代表の堤清二氏が逝去さ

れ、改めて企業の文化事業の今後が問われています。

愛知県では2回目となる「あいちトリエンナーレ」（8月10日～10月27日）が開催され、「揺れる大地 - われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活」をテーマに震災後の社会を強く意識した内容となりました。特に、今回新たな試みとなった岡崎会場での展示が注目を集めていました。地域の商業施設の倉庫や屋上、昭和の面影を色濃く残す住宅街などの日常空間に入り込んだ「異物」としてのアートが、新鮮な感覚を生んでいたように思います。

【本物を体感する展覧会へ】

2013年度も、巨匠作家の新たな側面に光を当てる展覧会が多く見られました。そこには、多くの人と共有できる「大きな物語」への志向が感じられます。展覧会を見に行く動機には、大きく分けて「知っているもの、見たかったものを見に行く」場合と、「知らないもの、珍しいものを見に行く」場合の2種類があるかと思いますが、近年特に前者のウエイトが増しているようです。

さて、経済協力開発機構（OECD）の調査によると、国民生活の幸福度ををはかる指数（BLI）では日本は世界21位とのこと。国内総生産（GDP）3位の日本ではいまだ仕事中心の生活が主流ですが、BLIはGDPに代わり近年国際的に脚光を浴びており、今後は経済効率最優先の時代から生活のクオリティを保つことのできる成熟した社会への変化が予想されています。今後、文化的なものへの関心も高まることが期待されますが、一方でライフスタイルと娯楽が多様化した今日、ミュージアムに足を運ぶ層は、以前よりも広がってきています。そのような中で、展覧会はどのように存在感を示していきましょうか。

現代はあらゆる情報がインターネットを通じて瞬時に手に入るデジタル化の時代にあります。画面での視聴に飽きたらず、相変わらず人々は音楽や演劇、スポーツの観覧のために会場に足を運びます。そうしたライブ体験が持つ魅力、文化財でいえば実物を自分の目で味わう喜びは、決して失われることはありません。展覧会でこういった一期一会の体験をすることができるのか、「本物」を体感する」という大きなストーリーをいかに提供できるかどうか、これからの展覧会のカギとなることでしょう。このように、他館の展示を見る中で得た視点を、これからの名古屋市博物館での活動にも反映させていけたらと考えています。（五味良子）

小さな着物の世界

平成26年3月26日(水)～4月20日(日)



振袖

上の着物は、たもとの長い、いわゆる振袖です。写真ではわかりにくいですが、裏地をきちんと縫い付けて、裾には綿も入っている立派なものです。ところがこの着物、今あなたが開いている「名古屋市博物館だより」より、ちょっと大きいくらいしかないのです。

この“小さな着物”は、一つだけではありません。博物館には、明治30年代から大正のあいだに、時も場所も別々の3人の女性によって製作されたものが、合計151点収蔵されています。

“小さな着物”の正体

これらの“小さな着物”は、何のために作られたのでしょうか？人形と着せ替え遊びをするため？いいえ、この小さな着物の正体は、裁縫を学ぶために作られた、着物の「雛形」です。「雛形」とは、大きさを縮小して実物と同じように作ったもののことをいいます。船や建物などを作るときにも、形状を確認するために作られています。

この、小さな着物＝着物雛形は、裁縫に使う鯨尺を縮小した「雛形尺」を使って仕立てました。着物の仕立てを練習するとき、雛形尺を使えば、使う布の量が少なくてすみます。そして雛形尺を鯨尺に持ち替えて同じように作れば、実物大の着物を作ることができるというわけです。考案したのは、千葉生ま

れの渡邊辰五郎氏(1844－1907)という人物です。

“小さな着物”が生まれたワケ

明治7年(1874)小学校で裁縫を教えていた渡邊氏は、雛形尺を使った裁縫法を考案します。その後、さまざまな学校で教え、明治14年に和洋裁縫伝習所(現在の東京家政大学)を創設しました。

この渡邊氏から教えを受けて作られた学校が愛知県にもあります。例えば、現在の椙山女学園の創始者椙山正式氏も渡邊氏からその教育法を学び、名古屋裁縫女学校を創設して裁縫を教えました。当館は、その名古屋裁縫女学校で作られた着物雛形も収蔵しています。

豊富な種類

“小さな着物”は、その種類がとても豊富です。

振袖のほかに、羽織、袴、袴、子どもが着る一つ身や三つ身などの衣服などが作られています。また、洋服もいくつか見られ、シャツや、「西洋前掛」という名のエプロンなどが作られています。さらには、裳、狩衣、水干などの時代衣裳も作られています。これらは実用的なものではなく、おそらく裁縫の知識の一つとして作ったものだと思います。

ていねいな技

これらの小さな着物をじっくり見ると、ほんとうに ていねいで美しい仕上がりになっていることに気づきます。それを見て思い出すのは、寄贈者の一人で、雛形製作者の孫にあたる方の言葉。自分の学生時代を思い出して、「裁縫の授業の成績が良くないと、結婚の際にさしつかえるので、先生は考慮して良くつけてくれる、という噂があった」と教えてくれました。「あくまで噂だけど…」ということですが、裁縫が女性にとって欠くことのできない技だったことを物語るエピソードです。着物雛形からは、このような時代の女性の裁縫の巧みさをうかがい知ることができます。

着物雛形＝“小さな着物”は、その愛らしさはもちろん、ていねいな仕事ぶりにも注目です。小さいけれど、美しい世界を、ぜひご覧ください。

(佐野尚子)



袴



袴



モンペ



シャツ



西洋前掛



ペチコート

福岡市博物館所蔵

特別展

幽霊・妖怪画大全集

JAPANESE GHOSTS AND YOKAI ARTWORKS

博物館がお化け屋敷になる!?

5/21(水) 2014 7/13(日)

開館時間

午前9時30分～午後5時

(入場は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日、第4火曜日(5/27、6/24)

主催 名古屋市博物館、毎日新聞社、日本経済新聞社、テレビ愛知

観覧料金

一般 1,300 (1,100) 円 高校・大学生 900 (700) 円

中学生以下 無料

前売ペアチケット 2,000 円 (5月20日(火)まで販売)

* () は前売および20名以上の団体料金。

* 前売券は5月20日(火)まで名古屋市博物館、チケットぴあ(Pコード=766-022)、ローソンチケット(Lコード=45659)、ほか主要ブレイガイドなどで販売。手数料がかかる場合がございます。事前にご確認ください。

* 名古屋市交通局の一日乗車券・ドニチエコきっぷを利用して来館された方は100円割引。

* 身体等に障害のある方は手帳の提示により、本人と介護者2人まで当日料金の半額。

* 各種割引は重複してご利用していただくことはできません。ご了承ください。

相馬の古内裏(部分) 歌川国芳 弘化期(1844-47)

詳しい展示替えなど最新の情報は公式サイトをご確認ください。

<http://yurei-yokai-nagoya.com>

博物館がお化け屋敷になる!?

吉川観方が収集した幽霊妖怪画のコレクションから選りすぐりの160件が名古屋にやってきます。骸骨からはじまり、幽霊、妖怪があらわれる展示会場はお化け屋敷さながら。

ちょっとその登場人物(?)をご紹介します。

まずは骸骨

人間だれしもが死に、やがて朽ち果て骸骨となります。人間と幽霊・妖怪の間にいる骸骨に、この世ではない世界へいざなってもらいます。

骸骨は普遍的な死のシンボルとして、恐怖でもあり、乾いたユーモアも感じさせるものでした。ただ、そんな骸骨に襲われたら……。

私きれい? それとも、こ・わ・い?

幽霊といえば、長い黒髪的女性で、白い死装束を着て、足がない。このイメージをつくりあげたのが18世紀に活躍した円山応挙です。死装束や足のない幽霊を描くことはそれ以前からもおこなわれていましたが、応挙が描いた妖艶な女性幽霊は、当時大評判となり、以後幽霊画の定番として、多くの絵師に描かれました。

吉川観方のコレクションのなかにも、伝円山応挙とされる作品が2点あります。1点は、すっと立つ(?)美人の幽霊。もう一点は極端な出っ歯に鋭い目つき。美しい幽霊と怖い幽霊。これが幽霊画



幽霊図 伝円山応挙 江戸時代中期



幽霊図 伝円山応挙 江戸時代中期

の大きな二つの潮流と言って良いでしょう。

スターお岩 誕生

江戸時代中頃から幽霊・妖怪が大流行しました。この火付け役が文政8年(1825)に江戸中村座で上演された「東海道四谷怪談」。夫に裏切られ殺されたお岩が幽霊となって夫に復讐するセンセーショナルな台本と、幽霊が出現する際の仕掛けで大評判となりました。この



「百物語 お岩」(部分) 春江斎北英 文政・天保(1818-37)頃 (6/15まで展示)

◎特別展

話は怪談の定番として、お岩はもっとも有名な幽霊の一人となりました。

人々は幽霊や妖怪を怖がるだけでなく、歌舞伎や凵などの舞台を楽しみました。その様子は浮世絵として出版され、幽霊・妖怪画でありながら人間を描いた役者絵として流通しました。

妖怪図鑑

幽霊・妖怪は、ただ恐ろしいものでなく、草木や動物と同じく、博物学の対象として図鑑となりました。「百怪図巻」には、見越入道、ぬらりひょん、ぬけくび、猫またなど30の妖怪たちが鮮やかに描かれています。

奇想の画家伊藤若冲が描いた「付喪神図」にはなんと可愛らしい付喪神（百年を経た器物が妖怪と変じたもの）が登場します。

江戸時代の人々にとっては、幽霊・妖怪は怖いだけではなく、キャラクターとして愛されていました。

妖怪動物園も開園します

もちろん普通の動物園には絶対いない動物の妖怪たち。古来人間を化かすとされた、狐、狸、そして猫。気味がわるい、蛇や蛙や蜘蛛も加わり、巨大化したり、人間に化けたり、大活躍。

左上から右へ
百怪図巻 佐脇嵩之 元文2年(1737)から、
ぬつぽっぽう・ぬれ女・ぬけくび・ひょうすべ
左中
付喪神図(部分) 伊藤若冲 江戸時代中期
左下
五十三次之内猫之怪(部分) 歌川芳藤
弘化4-嘉永5年(1847-52) (6/15まで展示)

ドキドキする幽霊・妖怪

怖いけど心惹かれる幽霊・妖怪たちを展覧会場でじっくりご覧ください。会場内では、ドキッと
する場所で待っているものもあります。さらに楽しんでいただくための仕掛けもご用意しています。

○講演会

「幽霊画はこうして生まれた」5月21日(水)

福岡市美術館学芸課長 中山喜一朗氏

「名古屋の妖怪たち」6月14日(土)

現代美術作家 山田彊一氏

いずれも午後2時から(午後1時30分開場)

講堂 先着220名

*聴講には本展チケット(観覧済み半券可)が必要です

*当日12時半より聴講整理券を先着順に配布します(1名様1枚限り)

○展示説明会

5月24日(土)、6月21日(土) 午後2時から(午後1時30分開場) 展示説明室 先着100名、聴講無料

○スマホで出た〜! 幽霊・妖怪

スマートフォンにアプリケーション(無料)をダウンロードし、所定のポスター・チラシ表面、さらに会場内の看板などにかざすと、幽霊・妖怪が飛び出します!

詳しくはホームページを御覧ください。

撮影した画像を博物館券売所で提示いただくと、当人のみ当日料金から200円引。ぜひ知りに送って、自慢してください。

○YKI48 総選挙

あなたが選ぶセンターは誰だ。会場内には、〈YKI48〉のメンバーとして選抜された幽霊・妖怪たちがいます。総選挙の投票所もありますので、ぜひ投票ください。投票いただいた方のうち抽選で48名様に素敵な記念品プレゼント。
投票期間 2014年5月21日(水)~6月29日(日)

YKI48のメンバー

彼女候補 1	薄幸な美女 2	枕元に立つ 9	浮気はダメ 10	ネコはけ 17	ネズミの王 18	鬼の隊長 25	やる気なし 26	話が通じない 33	なんじゃコリヤ 34	茶飲み友達 41	三味線うまい 42
夏は涼しい 3	念入りメイク 4	トイレの花子 11	昼は用なし 12	坊さんキツネ 19	タヌキ入道 20	滑稽わるい 27	必殺コンビ 28	ガン飛ばす 35	現役暴走族 36	人見知り 43	にぎやか 44
イケメン 5	知らぬが仏 6	龍んでくる 13	ケチャップよ 14	悟空ザル 21	へび女 22	合体ロボ 29	女性隊員 30	ほほ怪獣 37	執念深い 38	歌姫できる 45	脇指ガエル 46
憎めない 7	寒さに強い 8	男ストーカー 15	女ストーカー 16	吉良ガマ 23	オオムカゲ 24	嫌煙家 31	超ベテラン 32	元ヤンキー 39	総長 40	水きらずな 47	おつかい回 48
ビジュアル系ユニット 美YOU霊		おどかし系ユニット あなたにもタタリ隊		野獣系ユニット 妖怪ZOO∞		天然系ユニット 妖怪戦隊ヒョウキンジャー		硬派系ユニット チーム魍魎		一家に一匹系ユニット BEST PETS	



鳥瞰図 —さあレトロな日本の空旅へ！

鳥になって空高く飛び立てば、おそらく目の前にはこのような景色が広がるのではないのでしょうか。

空を飛んでいる鳥が斜め下に地上を見下ろしているような視点で描かれた図様を「鳥瞰図(ちょうかんず)」といいます。英語で表現するならば、「*bird's-eye view*」、まさに「鳥の眼の景色」です。

◆第一人者は吉田初三郎

空撮がまだまだ一般的ではなかった大正から昭和にかけて、こうした鳥瞰図—イメージで描かれた空中からのまなざしが、近代の鉄道旅行に対応した携帯に便利なガイドとなりました。鳥瞰図の技法を観光案内に用いたアイデアマンは吉田初三郎(1884～1955)という京都出身の画家で、大正2年(1913)、京阪電鉄の沿線案内図を描いたことをきっかけに各地の観光鳥瞰図を手がけるようになりました。

その後、彼は活躍の場を東京に移しますが、大正12年(1923)9月1日発生した関東大震災によって画室を焼失。幸いにもその直前に名古屋鉄道の仕事を犬山を訪れていたことが縁となり、木曾川畔にある名鉄所有の建物・蘇江倶楽部の提供を受け、ここを仮画室として再出発しました。そして昭和4年(1929)以降は、少し上流側の旅館を借り上げ、新画室としました。この新旧両画室をあわせて蘇江画室と呼ばれましたが、蘇江とは木曾の大江の意味で、古来木曾が岐蘇、吉蘇などとも表記されていたことにちなむ表現です。

大正13年(1924)から昭和11年(1936)まで、吉田初三郎はこの蘇江画室に観光社出版部を設立し、日本各地の鳥瞰図を制作しました。出版物には制作地を「名古屋市外犬山町日本ライン蘇江」と記し、日本ラインを全国に広く紹介しています。

彼は自らの鳥瞰図を「初三郎式」と称していましたが、大胆なデフォルメの中に主軸となる鉄道を直線的に描き、印象深い景観を作り出している点に大きな特徴があります。そして画面のどこかに、実際には見えても見えなくても、必ずといってよいほど富士山の姿が…。

◆鳥瞰図に魅せられて

こんな吉田初三郎の作品に魅せられ、その収集と研究に打ち込んだ人物が、愛知県一宮市出身の故小川文太郎

特別展 NIPPON パノラマ大紀行

～吉田初三郎のえがいた大正・昭和～

会期：2014年7月26日(土)～9月15日(月・祝)

氏(1898～1985)です。同氏は、昭和3年(1928)吉田初三郎制作による「養老電鉄沿線名所図絵」(写真)を旅先で入手したことをきっかけに鳥瞰図に魅せられ、昭和5年(1930)には初三郎の名古屋ファンクラブともいうべき「初名会」を結成して鳥瞰図の収集と研究にあたりました。昭和10年(1935)9月の新聞インタビューでは、その頃収集点数が1万点に及んでいたといいます。

同氏は収集に関連して、鳥瞰図はもとより、ポスターや単行本・絵葉書からさらに初三郎の主宰する観光社の広報誌や、全国各地の地方紙の細かな記事にも注意を向け、詳細な収集記録を残して鳥瞰図の全体像に迫ろうとしました。戦争末期名古屋市街地への空襲が激しくなると、収集品の一部を出身地である一宮市内に疎開させて散逸を防ぎ、戦後昭和49年から60年にかけては計5回にわたってコレクションの展覧会を一宮で開催しました。

この時からすでに30年近い歳月が流れていますが、これら小川文太郎氏によって収集され、空襲疎開によって今に伝わる鳥瞰図コレクションは、大正から昭和にかけて盛んに制作された鳥瞰図の研究において、貴重な一里塚となっています。

◆小川文太郎コレクションとの出会い

平成21年(2009)春、当館では所蔵資料による絵葉書展を開催しましたがその中で、昭和50年代に同氏よりご寄贈いただいていた名古屋汎太平洋平和博覧会(昭和12年開催)の絵葉書を展示いたしました。このことをきっかけに、鳥瞰図コレクションの所在が明らかとなり、ご所蔵者のご厚意によって4年がかりでその整理をおこなうことができました。

小川文太郎氏の収集資料は平成14年(2002)、大手出版社から「吉田初三郎のパノラマ地図」というビジュアル書籍が刊行される際にも、その基礎資料となったコレクションでもあります。この夏、当館では小川文太郎コレクションに伝わるさまざまな鳥瞰図を一挙公開いたします。大正・昭和の日本を空からじっくり眺めてみませんか。さあ、この夏はレトロな日本の空旅へ出かけましょう。*Let's take a bird's-eye view of retrospective Japan!*
(井上善博)

“わくわく”に出会う ～くらし体験学習事業をふり返って～

学校の授業にあわせて博物館を利用し、より深い学習をする機会を持ってもらおうと、博物館では、いくつかの事業を行っています。

その一つが、“くらし体験学習事業”です。小学3年生が社会の授業で、自分たちのおじいさん・おばあさんのころのくらしや道具、そのうつりかわりを勉強するときに、博物館で実物を見学・体験してもらおうというものです。博物館にとっても、昔の道具を通して、先人たちの知恵や工夫を子どもたちに伝える、とてもいい機会です。

子どもたちが見学・体験するために、博物館では展示物を充実させたり、体験室を設営したりして、会場を整えます。また、スムーズに見学できるように事前に学校の先生へ向けて説明会も行います。

おかげさまで、学校の授業が行われる12月から2月にかけて、毎年多くの小学生が訪れてくれます。平成25年度では名古屋市内外ふくめて250校約17,000人もの小学生が来てくれました。市内の小学校では95パーセントが来てくれています。

小学生たちは、2階の常設展示室で、洗濯板や火鉢、水の冷蔵庫など、衣食住の道具を一通り見て回り、メモを取ります。どういうふうにする道具か、それが今何の道具にかわっているか…、説明文を読んで、写し取っていきます。その後、3階「くらし体験学習室」へ移動し、2階で見してきた昔の道具をあれこれ体験します。たとえば、洗濯板で洗濯したり、蚊帳に入って寝転んでみたり。

子どもたちの様子を見てみると、道具は見たことないものばかりで、驚き、戸惑い、それが何かを知ろうと一生懸命です。そして、それを実際に触るという体験に、わくわくしているようでした。

「昔のお風呂の温度は何℃ですか」

あるとき、五右衛門風呂を見ていた子からこういう質問を受けました。五右衛門風呂というのは、鉄の風呂釜



で、カマドの上に据えて火をたいて沸かすお風呂のことです。

「何℃だろうね。熱いのが好きな人もいるし、ぬるめが好きなのもいるし、それぞれだよ。」熱い湯がいいなら木をたくさん燃やして、ぬるい方がいいなら水を足す、という風にすれば温度調節は可能で、そういった話も添えて説明しました。私自身も小さいころ、水道で水やお湯を出してお風呂の温度を調節していたなあと思いました。

それでふと思ったのですが、この質問した子の家では、お風呂を給湯器で沸かしているのではないかな。お母さんが台所にある給湯器のボタンで「設定温度42℃」というふうに設定している姿を見ていたのではないかな。「何℃ですか」と聞いたのは、そういう今のくらし方が影響していたのかなと考えました。

考えてみると、今では「温度は〇℃」と、はっきり数字で表すことが当たり前になっています。一方で、昔は数値で表すことはなく、そのときそのときの状況に合わせて行いました。

それはどの道具についてもいえることで、今では大量生産された同じものがお店で売られていますが、昔は状況に合わせて作られました。たとえば、鍬はその人の体やその土地の土質に合わせて職人さんが作っていたように。

“昔の人々が培った知恵”というものを、再認識することができました。

こういうふうな、今の生活に慣れた子どもたちが、はじめて見る道具を前に持つ素朴な疑問をきっかけに、私自身もささやかな“気づき”を見つけることがあります。私にとって、この事業をしていて(子どもたちと同じように)わくわくする瞬間です。

今年度もたくさんの小学生が、昔の道具とくらしのうつりかわりを勉強しにやってくるでしょう。“わくわく”に出会うべく、博物館もお待ちしています。(佐野尚子)



くらし体験事業の様子(汐路小学校)



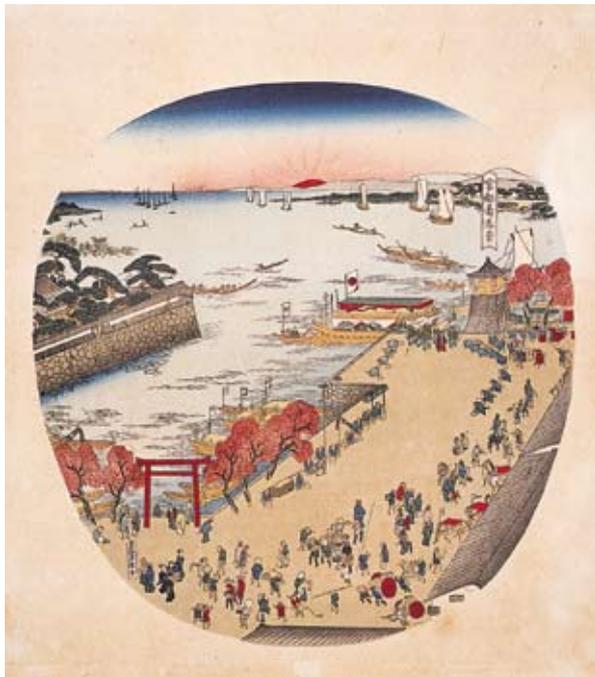
資料紹介

名古屋名所団扇絵集 宮船着春景

昭和9年(1934)

サクラサク？

「名古屋名所団扇絵集」は数少ない江戸時代の尾張名所を描いた一枚物版画としてよく知られており、観光案内や歴史書に頻出する人気シリーズ。しかし、江戸時代の版画を昭和に復刻したものであり、いささか問題を含んでいるのです。



「名古屋名所団扇絵集 宮船着春景」(館蔵)

「名古屋名所団扇絵集」(全22枚)のなかの一枚です。この団扇絵集は、尾張の画家、森高雅(玉僊、もりたかまさ ぎょくせん、1791-1864)が江戸時代後期の19世紀前半に描いた木版画を、中村浪静堂が昭和9年(1934)に復刻したものです。なお、昭和52年(1977)には、昭和9年版を印刷した画集が郷土史料刊行会から出版されています。

この団扇絵集のうち、江戸時代後期に作られた原本は、現存するものが少なく、これまでに「天王崎祭礼」「大須観音」「桜天神植木市」「上材木町盆中燈籠」「堀川花盛」の5図のみが確認されています。現存数の少なさから、当初はごく少数を摺った、私家版の摺物であった可能性があります。

原本がほとんど出回っていないので、昭和9年版の図版があちこちで利用されるようになったわけ

さて、掲出した「宮船着春景」は宮の渡し周辺の賑わいを描いた作品です。岸辺に盛りと咲く桜の花の鮮やかな赤い色彩が、華やかな印象を与える一枚です。ところが私はこの作品に対して、ずっと違和感が拭えませんでした。



「宮船着春景」部分拡大図

鳥居の右下をよく見てください。越後獅子(角兵衛獅子とも)が描かれています(部分拡大図参照)。さて、江戸時代の風俗に詳しい方は、もうピンときたでしょう。

越後獅子は、正月の門付芸で、少年が鶏毛をつけた獅子頭をつけて曲芸を行うものです。その他に同じく正月の門付芸人である鳥追の女性たちも、大八車の左上あたりに描かれています。

正月なのに桜がもう咲いている。私の違和感はこちらにあったのです。

これには復刻版という事情が絡んでいるのではないのでしょうか。もしかしたら、昭和9年当時、中村浪静堂の手元にあったのは版木の一部だけ、それも主版(墨の輪郭線部分)のみであったのかもしれない。

そのため、失われてしまった赤の版木は新たに一から彫り起こされることとなり、このとき近代人が陥りがちなミスをおかしてしまったのではないのでしょうか。つまり、題名の「春景」から現在の4月頃を想起し、これにより桜が満開に咲き乱れる図が誕生したものと考えられます。

「宮船着春景」の原本は確認されていませんが、あくまで森高雅が意図したのは「新春」風景であったのは間違いないでしょう。

このように、中村浪静堂による昭和9年版は、江戸時代後期の原本と比較すると版木の彫り直しがかなり行われているようです。また原本が落ち着いた色調であるのに比べ、復刻版はコントラストの強い色調に変えられています。

稀少な図版を広く普及させた復刻版の功績は大きいものがありますが、二次資料であることを肝に銘じて、十分検証した上で利用する必要があるようです。(津田卓子)